

氏名	たか 高	やま 山	まもる 守
学位(専攻分野)	博士(文学)		
学位記番号	論文博第406号		
学位授与の日付	平成13年3月23日		
学位授与の要件	学位規則第4条第2項該当		
学位論文題目	ヘーゲルにおける無の思想		

論文調査委員 (主査) 教授 加藤尚武 教授 藤田正勝 教授 岩城見一

論文内容の要旨

序文

- 1, ヘーゲルの哲学といえは、通常「無」などというものはおよそ縁のない思想だと思われているが、有無成、弁証法などヘーゲル哲学は根源的に無の思想である。
- 2, キルケゴールはつぎのようなヘーゲル批判を行っている。
 - a ヘーゲルは客観性の鬼と化して、純粹存在を終の住処とするにいたった。
 - b ヘーゲルにおいては、存在と非存在との間に生成として行なわれる変化が、ことごとく否定・非存在から肯定・存在への変化に置き換えられてしまう。
 - c 一切が化けものの胃袋のような媒介に「一挙にあわせて飲み込」まれ、客観的で肯定的な絶対的存在と化す。絶対的な「肯定」の哲学、絶対的な存在の哲学。
 - d ヘーゲルは実存に生きる本当の主體的思考家とは言えない。
- 3, これに対して論者は、次のような主張を反論として提示している。
 - a ヘーゲルは絶対的な「存在」、絶対的な「有」を説こうとしたのではなく、徹頭徹尾「無」を説こうとした。絶対的「存在」を説くヘーゲルは絶対的な「無」を説こうとしていた。
 - b ヘーゲルの絶対的な「存在」は絶対的な「無」の上に「のっている」。
 - c ヘーゲルの哲学は、たしかに一面、絶対的な「存在」の哲学である。しかしそれは、根本的には徹頭徹尾「絶対的な無」の哲学である。

第一章、『差異論文』における「無」の思想

ヘーゲルにおいても、フィヒテ、シュリング等と同様に、「絶対者」とは、それ自体としては絶対の「暗闇」、「無」なのである。しかしヘーゲルは、こうした「絶対者」を、それ自体直接的に捉えうるとは考えなかった。何らかの宗教的な境地において、これを直接的に捉えうるとするのは、もはや時代錯誤である。また、哲学的に直接捉えられた「絶対者」などというものは、いずれにしても「すべての牛が真っ黒である闇夜」(『精神現象学』)であるにすぎない。重要なのは、そうではなく、「絶対者」(「無」、「暗闇」)を結果として把握する、知るということ、換言すれば、「理性」において、つまり、崩壊する「知」の全面的な展開において、捉えるということだった。

「絶対者とは闇夜であり、光は闇夜より新しい。」(ズールカンブニ卷24頁以下)

「無が第一のものであり、そこからあらゆる存在が、つまり、多様な一切の有限なものが生まれ出た。」(ズールカンブニ卷25頁)

「そして両者の区別、ならびに、光が闇夜から現われ出ること、このことは絶対的な差異を意味するのである。」(同上)

ヘーゲルは、創造神話風に語っている。「絶対者」は「闇夜」であり「無」である。「多様な一切の有限なもの」、つまり、われわれの世界が、「光」である。「光」は、「闇夜」、「無」から生まれ出た、と。こうした神話風の語り口でとりわけヘー

ゲルが述べようとするのは、「闇夜」、「無」である「絶対者」と、「光」としての「有限な」われわれの世界（「あらゆる存在」、「多様な一切の有限なもの」との間)に存する「絶対的な差異」である。

これによって、目下の「最高の分裂」が克服される。すなわち、われわれの世界が単に「悟性」によって構築された、生命のない固定化された「部分」であることをやめて、生命に満たされて躍動する「総体」となる。換言すれば、「主観」と「客観」との分裂が克服されて、両者の「絶対的な同一性」が成就し、「私」（「主観」）が、いかなる事態においても自己を失うことのない真の「私自身」（「自己意識」）となる。つまり「私」（「主観」）が「絶対者」と一体化する。哲学とは、まさにこうした「理性」における「絶対者」（「無」、「暗闇」）把握の遂行にほかならないというのが、ヘーゲルの基本的な立場である。

第二、三章、イエーナ期とくに『信と知』における「無」の思想

「絶対無」は、無限論において直接的には、「有限なものの絶対的な無」として論じられた。それは、一切の「有限な」悟性的なものを「無」に帰する、「無限なもの」の「否定的側面」であり、「無限なもの」（「絶対者」）であった。

しかし、こうした「絶対無」としての「無限なもの」、「絶対者」は、単にこうした「否定的な」営みに留まるものではなかった。それは実は本来、それ自体「絶対無」でありつつ、「悟性」的な「諸存在」を「産出する」という、肯定的な側面をもつ「絶対者」そのものなのである。

「無限なもの」、「絶対者」とは、それ自体「絶対的な無」である。しかしそれは、そうしたものでありつつ、「悟性」として「諸存在」を産出するのである。そしてそれは、「理性」として、この自ら産出した「諸存在」をことごとく「無」に帰する。

ただし、「諸存在」をことごとく「無」に帰するとはいえ、そこに、何も存在しない「無」の世界が現出する、というわけではない。「存在」そのものと分離分裂した「悟性」的な「諸存在」——つまり、「非同一性」——を一契機とすることのない、単なる「絶対的同一性」、単なる「絶対無」とは、真の「無限なもの」、真の「絶対者」ではない。真の「無限」、真の「絶対者」とは、この「非同一性」を常に一契機として成立する、「同一性と非同一性との同一性」である。そうである限り、「絶対者」は、それ自体「絶対的同一性」、つまり、「絶対無」でありつつ、「非同一性」、つまり、それ自体「無」に帰する「悟性」的な「諸存在」を「産出」し続ける。

「絶対者」とは、こうしたダイナミズムとしての「絶対無」である。こうした「絶対無」をめぐるヘーゲルは、最終的に、こう印象的な論述を展開する。

「哲学のまずなすことは、絶対的な無を認識することである。」（ズールカンプ二巻410頁）

「思考 [=絶対者の理念] は、無限性として、また、絶対者の否定的側面 [=絶対無] として認識されるわけだが…この無限性、否定的側面とは、…有限性の純粋な無化である。しかしそれはまた同時に永遠の運動の源泉でもある。つまりそれは、無限である有限性の、すなわち永遠に自らを無化する有限性の源泉でもある。真理というもの [=いわゆる真理、有限な悟性的知] は、その誕生の地である神秘の深淵から立ち昇るように、そのように、こうした無と無限性の純粋な闇夜とから立ち昇るのである。」（ズールカンプ二巻431頁）

「だが、純粋な概念もしくは無限性とは、あらゆる存在がそこに沈潜している無の深淵 [=絶対無] である。」（ズールカンプ二巻432頁）こうして「絶対者」は、一切を絶えず産み出しつつ崩壊させる「絶対無」として呈示・描出される。

第四章 「イエーナ形而上学」における「無」の思想

その形而上学の主題となる「絶対的な自己同等性」にかんして次のような分析がなされる。

1. 「自体 (das Ansich)」, それ自体において存在するものとは、「一切の契機が根絶された」「自己自身に等しいものとしての統一そのもの」である。すなわちそれは、絶対的に「自己自身に等しい」、自己同一的な「統一そのもの」という以外の何ものでもなく、そこにおいては、それ以外の「一切の契機」、その「統一そのもの」がいかなるものであるのかに関して語られた一切は「根絶」され廃棄されている。
2. 「自体」とは、「無」としての「絶対者」そのものにほかならない。「主観」と「客観」との「絶対的な同一性」がかたられないのは、それ自体に関して語られた一切が根絶され廃棄された結果である。
3. 「絶対的に第一のもの」として顕になった、自己同一的な「統一そのもの」なのである。一切の「悟性」的な「知」お

よび「諸存在」が「無」に帰することにおいて成就する、およそ「分裂」のない「絶対者」、「無としての絶対者」である。

その形而上学の最終局面である「最高存在」について次のような分析がなされる。

1. 「最高実在」において、かの「絶対無」（絶対的否定）が主題化されている。ただし、「最高実在」については、「絶対無」もしくは「無」という表現は用いられていない。
2. 「無それ自体 (Nichts an sich)」（イエーナ形而上学162頁）あるいは「非存在 (ein Nichtsein)」（同上）と規定されるのはむしろ、個別的な「規定性」、「諸存在」、つまり、「世界」の方であって、「最高実在」は「絶対的な存在」（同上）である。
3. 「光」と「闇」についても、同様に用法がほぼ逆転しており、ここでは「光」であるのは「最高実在」もしくは「最高実在」にとっての「世界」であり、「闇」であるのは個別的な「諸存在」もしくは端的にこの「世界」である（同上）。
4. 「最高実在は世界を創造したのだが、この世界は、最高実在にとってはエーテルのように明るい透明さと鮮明さを備えている。しかし、世界はそれ自体にとっては闇なのである。」（同上）「最高実在」、「絶対者」は、「絶対的存在」であり、それ自体もしくはそれにとっての「世界」とは、「明るく透明な」「光」である。
5. 「光」としての「絶対的存在」（純粹存在）とは、全く同様に「暗闇」としての「絶対無」（純粹無）なのである。全面的な「光」・「絶対存在」と全面的な「暗闇」「絶対無」とは、その限りそこには認知されうる何ものも存在しないことにおいて、全く同一の規定である。

第五章、『精神現象学』における無の思想

ヘーゲルはこの「序論 (Einleitung)」のなかの一文にこう書いている。「したがって、この〔精神現象学の〕道程は、懐疑の道程と、あるいは一層本来的には、絶望の道程と、見ることができる。」(3.72) これによって次のことが分かる。

1. 『精神現象学』の順次的なプロセスは、「懐疑」が深まる過程、あるいは「絶望」が深まる過程なのである。
2. その究極の到達点である「絶対知」は、すべてを把握し、すべてを知り尽くした絶対的存在（神）の境地、あるいは、そうした絶対的な知を意味するのではない。
3. 本当のところは何も知りえないのだという、「懐疑」の果て、「絶望」の果てに行き着く、いわばソクラテス的な徹底した「無知」の「知」であり、そうしたきわめて否定的な意味での「絶対知」なのである。
4. あらゆる存在を統合した絶対的な存在、あるいは、何もかも知ってしまった絶対的な知などというものは、虚構にほかならないということを、ヘーゲルは早い時期からこの上なくよく知っていた。
5. 人間が、また総じて存在するもの一般が、また総じてわれわれの知が、対立と矛盾に深くむしばまれ、徹底して「非同一的な」「否定的なもの」であるということを、ヘーゲルは早くから知悉していた。「多様な存在は、二つの闇夜の間に支えもなく横たわっている。それは無の上ののっているのだ」（ズールカンプニ卷26頁）という言葉に示されている。

第六章 『論理学』における「無」の思想

a) 「存在」

これまでの論述を振り返って、「存在」ということで考えうるのは、

- i) 「悟性」の産出する「存在」、「諸存在」、
- ii) 『精神現象学』「感性的確信」節で提示された、「このもの」の認識における「純粹存在」、
- iii) 「絶対者」つまり〈存在〉そのものという三様態である。しかし、このうちの第一の様態(i)が「存在」（純粹存在）ではないことは明らかである。なぜならそれは、「悟性」によって制限固定化され「規定された」「存在」であるのだから。第三様態の〈存在〉こそ「存在」と見なされる。

このような捉え方がなされざるを得ないと言うことは、次の事情によって明らかになる。

[a] 『論理学』が、『精神現象学』の「絶対知」つまり「絶対者」把握を直接引き継いで始まるということ。

[b] 「純粹存在」をめぐる、とにかくもまずはパルメニデスの思想に言及されるということ。

[c] さらに、「存在」、もしくは、「生成」までを含む本章での主題が「絶対者」であるという言及が繰り返されること。

もとよりこうした捉え方は、この「存在」が、徹底して「純粹な空虚」であると規定されることによって、違和感を惹起

しうる。たしかに「絶対者」としての「存在」は、およそ「空虚」であってはならないだろう。それは、たとえ「無規定」であるのだとしても、まさに一切の存在を包摂しているが故にこそ、「無規定」であるのでなければならぬだろう。この「存在」のうちには、「絶対者もしくは神という表象における一層豊かな諸形式のうちに含まれているはずである」一切が、包摂されている。つまり「それは、さまざまに規定される意識の多様的一切を廃棄しつつ保存している」という。

端的な「存在」(純粹存在)とは、たしかに単なる「空虚な言葉」にすぎず、そこにおいてはいまだ何も捉えられてはいない。その限りそこに存するのは、「空虚な直観」・「空虚な思考」のみである。しかし、いわば事柄としては、この「存在」そのもののうち一切が詰め込まれている。それは、そうしたものとして「絶対無」である。

「生成」論においても「絶対無」論が展開されている。すなわち、「絶対無」とは、「純粹存在」であり、かつ「無」である。そしてそれはまた同時に、絶えざる「運動」・「闘争」、つまり、「生成」である。

ここにおいてはこの「生成」こそが、「真理」である。というのも、「存在」もしくは「無」が、そのものとして真理(「絶対者」)であるわけでは決してないからである。「生成」、つまり「非同一性」、「矛盾」、「アンチノミー」においてこそ、「存在」つまり「無」が、それとして顕現する。真理とは、単なる「絶対的な同一性」ではなく、「非同一性」において顕現になる「同一性」(「同一性と非同＝性との同一性」)である。

「絶対者」とは、(存在)である。それは同時に「無」である。そして、その「真理」は「生成」である。こう論じられる論議は、「絶対無」論の再現と見ることができる。

そしてさらには、この「絶対者」論こそが、『論理学』の全体を、ひいては、ヘーゲル哲学全体を、貫き通すものであることが、ヘーゲル自身によって宣言される。

「この始まりをなすものは、それに続く一切のものの根底に存し続けるのであり、そこから消えてなくなることはない。……このようにして、哲学の最初に位置づくものは、それに続く一切の展開のうちに現前し、自らを保持する基盤であり、それ以後の諸規定に徹底して内在する、変わらざるものである。……存在と無とのこの統一は、最初の真理として断固根底に存し、それに続く一切のものの場(エレメント)をなす。」

終章

- 1, 「絶対者」とは、およそ「知」の及ばないもの、この意味で「無」、「暗闇」であると「知の絶対的な非存在」、この意味で「ゼロ」であり、「無」であった。
- 2, 「絶対者」が、何らかの意味で「神」と同等視されうるものであるならば、それが一切の知を越え出た存在(その意味で「無」)であると捉えられる
- 3, ドイツ観念論哲学の主要な構築者たちのいずれもが、「絶対存在」(「絶対者」)を、それ自体「非存在」、「ゼロ」、「無」と捉えていた(注1. 渡辺二郎)。
- 4, 西田幾多郎は、ヘーゲルの辯證法の核心は、「絶対無」(「無」もしくは「絶対無」の「自覚」)にある、と説く。すなわち、西田によれば、その「絶対無」・「絶対無の自覚」(「眞の自覚」)においては、「行爲的自己」もしくは総じて「自己」が「自己の意義を失」っている。ここにおいては、いわゆる「私」(「自己」)という意識がなくなっている。そうであることにおいて、ここには絶対的に「何物もない」。それは「自己の底」にある「絶対に非合理的なるもの」なのである。西田において、ヘーゲル哲学とは、徹頭徹尾「絶対無」の哲学なのである。
- 5, 田辺元がまた、こうした西田の議論を踏まえ、ヘーゲル哲学の根幹を「絶対無」に見る。「如何なる相対的統一をも超えて其動的発展を内に包む超越的全體たるもの」を見ている。「之を無にして有の根柢たる絶対無といひ、有無を超える兩者相入の眞空といふ」と田辺は結ぶ。
- 6, ヘーゲル哲学の単にいわば外見を追うのではなく、その本来の内的な哲学的意味を探ろうとするのであれば、その暗部に光を当てること、それを裏側から見て取ること、つまり、ヘーゲル哲学を「絶対無」の哲学と見ることこそが、重要である。

論文審査の結果の要旨

- 1, 全時代を通覧したヘーゲル研究

カントやフィヒテ、シェリングの研究が基礎となるテキストの校訂がほぼ完成しているという状況であるのに対して、ヘーゲルの場合には、従来「ほぼ自筆テキスト」に準ずるものと評価されていた「講義録」類が根本的な資料批判から、再校訂されることになり、従来、ヘーゲルの全体像を示すとみなされていた観念形態はすべて見直しを要求されるという事態になっている。こうした状況のなかで、イエーナ期から晩年にいたるまで、無の哲学としてのヘーゲル哲学のあり方を示す主要な文章のすべてにわたって、解説し、ヘーゲルの無の哲学の全体的な意味を明らかにしたことは、本論文の最大の功績である。

2, ヘーゲル哲学の否定性に対する独創的な評価

時代別の発展相に関しては、ヘーゲルがイエーナ期では、否定的な性格の強い弁証法を展開したのに対して、体系期では、肯定的な性格が強くなっていくというのが、ほぼ定説に近い見方であった。それに対して論者は、無の根元性という立場が、イエーナ期以降、ヘーゲルが終始一貫して認める基本的立場であったという、大胆で斬新な解釈を打ち出した。

3, 無の根元性についての独自の解釈

無の根元性という概念そのものについても、「無が根底にあって、存在はその無の発現形態である」という意味で無の根元性が成立するのではなくて、無が存在に対して自立的な形而上学的存立をもつという解釈を避けて、いかなる存在の次元においても無との関わりが不可欠であって、その意味において無の根元性が成立するという、いわば「相関性における根元性」という解釈態度を打ち出した。

4, テキスト解釈上の問題

公開審査においては、事前に審査委員から提示されていた質問項目に従って、論者の引用した主要なテキストのほとんどについて、逐条的に詳細な批判的な検討がなされた。第一に、引用されたテキストが前後の文脈から恣意的に切り出されていないかどうか。第二に、ヘーゲルが他人の論旨を批判的に評価するために自分の文章のなかに織り込んだ文意が、ヘーゲル自身の主張と誤って解釈されていないか。第三に、ヘーゲルが存在の根元性を前提して述べつつも、それを明示していない文脈において、不当に否定性の契機を強調する解釈に陥っていないか。等々。

論者は、これらの問題点に対して逐一的に誠意をもって、自説を詳細に説明した。その解釈は、論文調査委員が、そのすべてに同意できるものではなかったが、現在の研究状況において、ひとつの有力な解釈として世界の学界に提示するに十分な意義を持つものであることを認めた。

5, 日本哲学との関連づけ

論者は、西田幾多郎、田辺元およびそれらの影響下にある他の思想家の言辭を引用して、ヘーゲル哲学と根本的に共通するものをもつと評価しているが、この点については、論文調査委員の多数が批判的な評価を下した。

6, 全体的なバランス

論者は、すでにシェリング、ハイデガー等に関してすぐれた業績を発表しており、ヘーゲル研究においても日本の学会において永年にわたって指導的な役割を果たしてきた。精密なテキスト解釈と平明な表現とが、論者の特色とされている。本論文においても、そのようなすぐれた特色が十分に発揮されており、周辺的な研究状況に対する高い水準の理解、きわめて高度の解釈上の困難さをもつテキストに対する精密な解釈、その解釈内容の平明な記述に成功している。

以上審査したところにより、本論文は博士（文学）の学位論文として価値あるものと認められる。二〇〇一年一月六日、調査委員三名が論文の内容とそれに関連した事柄について口頭試問を行った結果、合格と認めた。